〔公開講座要旨〕

迦才の凡夫化土往生説について

研究員　工藤　量導

唐初の長安に活躍した事蹟不明の学僧・迦才の『浄土論』は、南都や叡山の日本浄土教の黎明期では重視されたが、法然以後は一転して道綽・善導の系統が中心となり、その法系から外れる迦才の研究は近代まで停滞した。その思想についても、道綽から善導への正統的な系譜に対する傍流として位置づけられていたことに加えて、凡夫が往生する西方浄土を低位な化土と判定するなど、日本浄土教の淵源となる凡入報土説や本願称名念仏説と乖離した学説がみられることから、道綽から「後退」した、あるいは善導と比して「不徹底」「過渡的」との評価が通説となる。このような宗派学の研究視座にもとづく認識は、唯一の専著である名畑応順『迦才浄土論の研究』を含め、現在にいたるまで研究者の側にも多分に残存しており、研究以前の段階で、固定化された結論を余儀なくされている。

本講座の趣旨は、従来のような道綽・善導との比較による評価軸から解放し、迦才の浄土教思想のどこまでが同時代の思潮傾向に同調したもので、どこからが独自の思想であるのかを腑分けして捉え直し、中国浄土教における迦才の位置づけを再評価することにある。浄土教の思想研究における中心的な課題は、劣機の凡夫がいかにして救済されるか、すなわち凡夫往生が成立する思想構造を論理的に示すことにある。従来の浄土教思想史は、本願称名念仏を根拠とするロジックに偏重しすぎていたきらいがある。

筆者は道綽・善導の凡夫の報土往生説に比して、これまで消極的な評価が下されきた凡夫化土往生説こそが、迦才の思想全体を貫く基本的なコンセプトになっていることに着目し、往生思想の内実を構成している衆生論（誰が）・実践論（何をもって）・仏土論（何処へ）という諸教説の総合的な形成過程をめぐって、同時代の文献との丹念な対照研究を通じて論究するという方法論を用いた。対照する文献の選定にあたっては、通説の批判者であった道綽や善導の思想ではなく、むしろ浄土教を主たる信条としない学僧たちの資料を当時の標準的理解と捉えて、迦才との差異を明確にした。具体的には、三論宗の吉蔵『観経義疏』、華厳宗の智儼『捜玄記』『孔目章』、地論学派の浄影寺慧遠『無量寿経義疏』『観経義疏』等の典籍、さらには敦煌文献を利用して摂論学派による『摂大乗論釈』の注釈書類との思想交渉を重点的に指摘し、当時の長安で最も流行した摂論学の素養をもつ迦才の思想的特徴を明示することによって、迦才独自の凡夫化土往生説が形成された経緯を描き出すものである。

本発表で明らかになった凡夫化土往生説の思想史的展開についてまとめたい。隋代の慧遠や吉蔵は西方浄土を低位の化土として位置づけるのが通説であったが、真諦訳『摂大乗論』の教理研究の進展に伴って十八円浄説にもとづく報土説が有力になり、智儼や道世の教説のように、別時意説が絡むことによって低劣な凡夫が即時に通入することは不可能となり、菩薩を主体とする浄土教も展開された。このような状況を鑑みて、迦才は隋代の西方浄土観に回帰しつつ、さらに独自の視点から凡夫往生の意味を模索する中で凡夫化土往生説を生み出した。迦才の凡夫化土往生説は、道綽の凡夫報土往生説との比較ではなく、隋唐代の思想史的な文脈を俯瞰する中でとらえてはじめてその意義が明らかになる。すなわち、報土往生説から化土往生説への流れは思想的な後退ではなく、摂論研究の高まりという歴史的経緯に同調してあらわれた凡夫往生説の必然的な展開であることを明らかにした。